

WHAT'S Bunka

No.06
TAKE FREE

「毎日を楽しむためのヒントを探す。」

"What's Bunka" by KAKAMIGAHARA MIRAI CULTURE FOUNDATION.



事務所移転のお知らせ

公益財団法人かかみがはら未来文化財団は、令和7年4月1日より、「各務原市文化会館」の指定管理を受託することに伴い、以下のとおり事務所を移転することとなりました。

文化会館では、人々の「つながり」を形成する地域の文化拠点として、文化芸術を創造・発信し、そこに集う人々に感動と希望を与え、創造性を育てていく場にしていきます。

01 事務所の住所が変わります。

新住所：各務原市蘇原中央町2-1-8
移転日：令和7年4月1日
電話番号：058-372-7231(財団事務局) 058-389-1818(文化会館)
FAX番号：058-371-0061
開館時間：8:30-22:00
休館日：毎週月曜日*祝日の場合は開館。年末年始(12/28~翌年1/4)

02 文化会館ってどんなところ？

各務原市文化会館[®]は、収容人数1062人の「市民会館」と、収容人数435人の「文化ホール」の2つのホールを所有する会館です。

会館は、地域住民の文化活動や交流の拠点となる施設として、コンサートや演劇、ダンスの公演及び発表会、また地域企業の研修やセミナーなど、地域の方々のニーズに合わせた様々な用途で使用されています。

また、多様な講座の提供やクラブ・サークル活動の支援などを行う「中央ライフデザインセンター」や「同・図書室」を併設しています。

※令和元年7月、(株)日本一ソフトウェアがネーミングライツを取得し、「プリニーの文化会館(プリニーの市民会館、プリニーの文化ホール)」という愛称で親しまれています。

03 <館長の話> 「市民との文化・芸術の、身近な交流の場としてのホールを目指して」

長い歴史を有するプリニーの市民会館と文化ホールは、市民の方々が大切に育て、活用されてきたと思います。この二つのホールは、貴重な財産であり、これからも長く大切に使用されていかなくてはならないと思います。

私は長い間、音楽と共に歩んできましたが(現在もですが)、各地のホールにより、沢山の方々と音楽を通して感動を共有することが出来ました。

これからも、素晴らしいアーティストを迎え、また市民の方々にとりまして、身近で使いやすい、そして感動を共有出来るホールを目指していきたいと思っています。

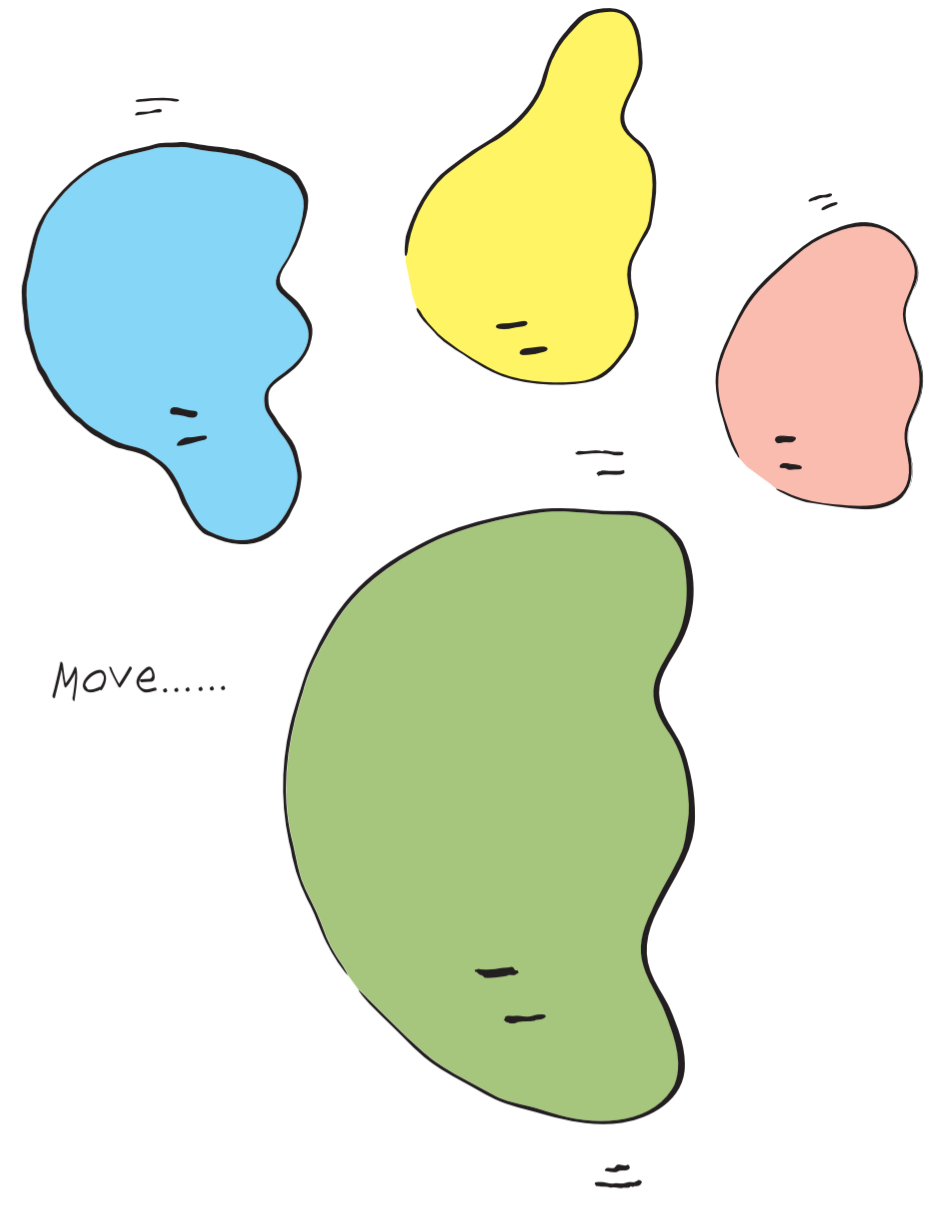
各務原市文化会館 館長 坂本和彦

文・監主 英二

INFO.： 企画制作/発行：かかみがはら未来文化財団

発行日：2025年3月1日
アートディレクション：北住尚己(株式会社エコムクリエーション)
デザイン：本瀬玄真(株式会社エコムクリエーション)
テキスト制作：河合ほか・岩永朱里(かかみがはら未来文化財団)
印刷：株式会社イナバ印刷社
スペシャルサンクス：各務原市民のみなさま

MEMO： 各務原市の人口は約14万人とのこと。そう思うと、マーケット日和サポーターに参加した方は、ほんの一握りですね。それでも、休みの日の時間を、まちの活動に使っているのは、それぞれ何かしらの理由がある。自分が知らない世界に踏み込むことは怖いことだけれど、そういった決断が必要なのかもしれません。



「私の文化。」

このコーナーは、文化財団のスタッフが交代で「文化」について語ります。誰が担当するかは、上下の関係なく平等にクジ引きで決めます。6回目となる今回は、1対1の騎打ちの結果、ついに文化財団の常務が登場します(なかなかレアですよ)。

文化財団という、イベントを企画しているイメージがあるかもしれませんが、安心安全に健全な運営を行うために、事務的な作業も大切になってきます。日々、頭を使い、足を運び、時には首を垂してくれたりと、大黒柱として支えてくださっている存在です。思わず、寄り添いたくなる内容となっております。ぜひご一読ください！

テレビ番組「遠くへ行きたい」をご存じですか。

かれこれ半世紀ほど続いた1970年代に最初の放送がはじまった超長寿番組です。婆ちゃんが好んで見ていたので、子どもの私もよく一緒にお菓子を食べながら観ていました。今でも毎週欠かさず観ていますが、オープニング曲の「しらぬいまち」を聴いてみたい、と聴くと子どもの頃の鮮明な記憶がよみがえる時があります。蚊取り線香と扇風機、そして小さな白黒テレビがあった畳の部屋。ボン菓子とあられせんべい。

「WHAT'S BUNKA」を考えてみました。それは舞台とか展覧会でなく、なぜか「婆ちゃん」と「遠くへ行きたい」になってしまいました。文化って、婆ちゃんが言っていた言葉や食べ物、お祭り、お盆、お正月……私たちの暮らしや生活の全部が文化になると思います。

「遠くへ行きたい」は番組台本をあまり作らないそうです。なんだか、電動バイクの番組と似ていますね。そして、「おいし」「きれい」「すて」「だけ」では終わらずに、その土地ならではの理由を掘り起こしてくれる納得感が心地良いです。私たちの生活とそこの土地の伝統や芸術工芸が結びついて「文化芸術」となり、その土地の大きな分母になってその地域を支えているのではないのでしょうか。

「WHAT'S BUNKA」って……ボン菓子とあられせんべい、久しぶりに買ってみたいかな。



はじめに。

毎年11月3日の文化の日に、学びの森・各務原市民公園・那加地区商店街で開催しているマーケット日和は、マルシェや音楽、アートなど、毎日の暮らしを楽しむヒントに出会えるイベントです。また、来場者として楽しむだけでなく、「まちの人と関わりたい」「新たな挑戦をしてみたい」、そんな思いを持つ人が集まり、一歩踏み出すきっかけの場所でもあります。これまでボランティアスタッフに運営のお手伝いをお願いしていましたが、そこで生まれた繋がりを次に活かしていきたいと思っていました。そこで、11月3日以降も継続してまちと関わる場をつくるため、2024年6月に「マーケット日和サポーター制度」を始動させ、学生から社会人まで立場も年齢も様々な、25名ものサポーターが集まりました。今回は、12名のサポーターにインタビューを実施。参加したきっかけや活動を通して成長したこと、皆さんの今後についてお届けします！



インタビュー 場所提供

- ①旧文具店
那加メインロードで、文具店兼住居として使われていた3階建ての建物。今後はまちを面白くするための拠点のひとつにするべく、まちのメンバーで活用方法を模索中。
- ②花と喫茶 karakuru
2024年11月、JR那加駅から南に伸びる本町通り沿いに、花と喫茶のお店としてオープン。一人でも過ごしやすい、毎日食べたいくなるおやつや、飾りたくなるお花と出会えるお店です。



MARKET BIYORI SUPPORTER INTERVIEW

マーケット日和 サポーター インタビュー

募集を知り、応募に至った動機は人それぞれ。身近にいる友達の大げさな感じや出来事があったり、各務原が好きという気持ちが生じた。新しい場所に参加し、野を広げるために応募しました(大西)「各務原に住んで近所くらいで、各務原を知り、人の繋がりを広げるために参加しました(玉井)以前参加したイベントボランティアで、普段は関わる機会のない人達と交流し、楽しい時間を過ごすことができて、もっと大きいイベントに参加したいなという経験ができるのではないかと、思い参加しました(田中久)といった人とのお会いや意見を求めて参加した人もいます。



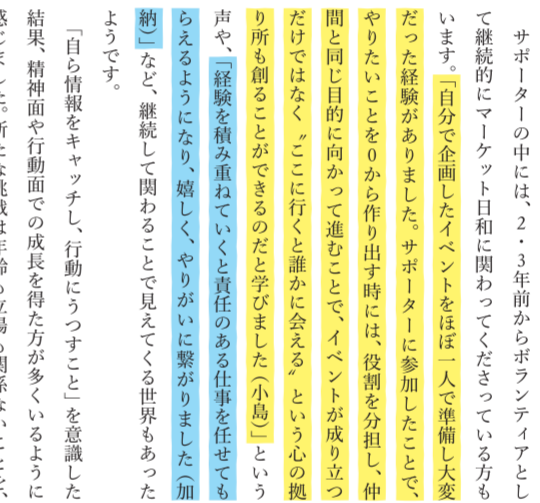
驚くことに、マーケット日和の存在を知らなかったと答える方がほとんど。どこからサポーターの情報を得たのか話を伺うと、主に情報源が2つ見えてきました。1つ目はSNS。各務原で何か面白い活動がないか調べていたところ、SNSのおススメ欄に募集投稿が流れてきたのだとか。2つ目は「知人からの紹介」。岐阜県面白ことなかなと知人に尋ねたところ、「各務原にマーケット日和という面白い活動があるよ」と教えてもらったという方もいました。ネットで情報を得られる社会はありますが、対面の会話で得られる情報は大切ですね。

また、文化祭みたいでワクワクしました。大人になるとこんな経験はできないですね(葛島)「初対面でも話すことに苦手意識があったけれど、作業しながらだと、これどうする?、これいいね」と会話や交流が生まれました。こういふ考えもあるのかと発見が繋がっていき、田中久)という感想や、みんな積極的に動いて、みんなで作っているイベントなんだと再確認しました(田中久)などのように、他人同士だった関係が、段々とチームとして成長していく様子を垣間見ることができました。マーケット日和当日の感想として、(一部で来場者の対応を担っていた時に、80歳くらいのおばあちゃんが、初めて来たけどどの年代でも楽しめる良いイベントですねとわざわざ伝えに来てくださった方がすごく嬉しかったです(加納)と話してくださる方がいました。真摯に活動に取り組んできたからこそ、お客さんから掛けられる言葉は、より一層心に沁み込むものがありますよね。



サポーター制度では、WEB記事作成、SNS発信、マーケット日和会場の装飾づくり、定例会、商店街リノベなど、様々な活動を行いました。その中で特に印象に残っていることを尋ねると、「各務原にこんな場所があるなんて知らなかった」という声が多くありました。来場者、出店者、サポーター、市民でなく人も、各務原に興味を持って参加している人が大勢いることに驚きました(飯田)「学びの森や市民公園では様々なマルシェが行われていて、音楽が流れ、芝生でくつろぐ人や、犬と散歩している人達を見て、こんなに良い公園があったと初めて感じました(大西)」。皆、まち歩きをたずねずと地元に住んでいて、こんな魅力的な場所やお店があることを初めて知ることができました(花森)と、普段とは違う視点でまちを見ることで新しい発見があったようです。

また、文化祭みたいでワクワクしました。大人になるとこんな経験はできないですね(葛島)「初対面でも話すことに苦手意識があったけれど、作業しながらだと、これどうする?、これいいね」と会話や交流が生まれました。こういふ考えもあるのかと発見が繋がっていき、田中久)という感想や、みんな積極的に動いて、みんなで作っているイベントなんだと再確認しました(田中久)などのように、他人同士だった関係が、段々とチームとして成長していく様子を垣間見ることができました。マーケット日和当日の感想として、(一部で来場者の対応を担っていた時に、80歳くらいのおばあちゃんが、初めて来たけどどの年代でも楽しめる良いイベントですねとわざわざ伝えに来てくださった方がすごく嬉しかったです(加納)と話してくださる方がいました。真摯に活動に取り組んできたからこそ、お客さんから掛けられる言葉は、より一層心に沁み込むものがありますよね。



様々な理由を持って参加したサポーターの皆さん。約半年間、頭と体を動かしながら活動を行ってきましたが、心境にはどんな変化があったのでしょうか……。「強制的に言われてやるのではなく、自ら情報を得て、知り合いのいない場所に行くのが大きな成長だ」と思いました(飯田)「以前、モテモテするだけで話しかけられなかった経験があって、今回は自ら話しかけて楽しい雰囲気になれるように、積極的に動くことができました(葛島)」。といった自身の課題に取り組んだ方や、「性別・年齢・職業・パラパラで、学生や若者達と話せるのが不安もありましたが、話を通して仕事以外の人の繋がりを広げられたことが大きな収穫でした(玉井)」。他の人たちが参加している背景を知り、その委ねを受けて、自分が参加して良かった方が多いと思わせてもらえました(大西)など、前向きな気持ちへと変化した方もいました。

また、マーケット日和の当日スタッフとして参加し「本番に来るお客さんが、ここに来れば全ての情報を得られる」と思っていた方が多く、与えられた情報だけじゃなく、自分でもサポーターの事も意識していきたいと思っていました(加納)「こういった次回以降に繋がっていきたくて、声もあがり、そういった気持ちを持った方がイベントを支えてくれたのだと実感しました。



インタビューを通して、サポーターが感じた様々な気づきや変化に触れられました。今後の彼らの展望はどうなるのか覗いていきましょう。「フライングでこーヒーの出店していて、これまでは限界まで活動することが多かったのですが、活動を通して地元も面白いなと思いました。次は、自分のやりたいことを地道で実行していきたいな思っています(佐藤)」。住んでいけど知らない良い場所があることを知り、大学の卒論で各務原について調べているのいいなと思えました(花森)。「自分の好きを追求している人達を見て、私も熱中できるものを見つけていきたいと思います。まずは、自転車かメラを持って各務原を巡り、自分だけの好きを見つけたいです(大西)」というように、地の良さを再発見し、各々の環境を活かした動きが始まるようで、今後の動向が楽しみです。

なかに「答えを持っていない」という方も。ずっと考えてはいたけれど、今は答えを導き出せなかったとお話しくださいました。「文化」の定義は捉えにくいもので、無理して回答を出す必要はなく、まずは「文化って何だろう?」と考える作業が大切なかもしれないと感じました。この質問をしていると、他者の物事に対する感じ方や価値観に触れることができます。インタビュー中も、「ああなるほど」と相槌を打つ方もいて、難しい問いではありますが、考えで共有する作業は面白いなと改めて思う時間でした。



本機紙で恒例の質問「この質問が一番難しい」と頭を悩ませつつ、十人十色な回答をいただきました。「人との繋がりが生まれる場所」その時代を表現している「お祭り」DNA「自分らしく」波並べてみると様々な捉え方が分かりますね。例えば、人との繋がりが生まれる場所」やその時代を表現しているものは、古く伝わる文化も、新しく生まれる文化も、一人では残すことはできず、他者と共有される。連の流が文化だと話す人もいました。また、一人が人らしく生きていくものでは、カメラやサイクリングなどの趣味を楽しむ、豊かな日々を過ごすことができるのは、先人が「文化を生み出し、発展を繰り返してきたおかげだ」という考えもありました。

おわりに。

マーケット日和は、2024年で11回目を迎えました。公園での過ごし方を提案し、日常的な賑わいの創出を目的にスタートし、時が流れ、賑わいの創出は公園からまちへとエリアを広げられました。各務原には、新しい人や出来事を受け入れる土壌があるように感じます。サポーターの活動で人と人の繋がりを実感できたのは、そういった土壌のおかげかもしれません。サポーターの皆さんへ「あなたにとって文化とは?」と聞く中で、今、マーケット日和は新しい「まちの文化」を創っている最中なのかもしれないと感じました。まちに興味を持ち、まちを面白がり、自分達の暮らしをプラスにしたいという共通の思いが広がりはじめているのではないかと、今後の展開が楽しみにするインタビューでした!

Q1 マーケット日和サポーターに参加した理由

Q2 活動で印象に残っていること

Q3 「自分、成長したな」と感じたこと

Q4 今後、挑戦していきたいこと

Q5 あなたにとって「文化」とは?